

星花女子プロジェクト

煉音

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

登美司 つかさ様（ID：59215）主催 星花女子プロジェクト

参加作品を投稿させていただきます。

一読あれ。

目次

まだ知らない君の音	
禁断の果实完売	1
ちびっ子の願い	5
ラグナロク（仮）の始まり	8
似たもん同士？	11
改1	14
改2	17
お昼寝ガールズ	
不思議な出会い	20
偶然の出会い	23

まだ知らない君の音 禁断の果実完売

高等部に入ってから変なんに絡まれるようになった。

「ねえねえ、そろそろ教えてよお。そしてりっちゃんに相談しおーよお」

一人、このちっこいのや。名前は榛東葎っちゆう5組の子で、誰とでも話せるちよつちしっこいやつやけど、なかなか友達思いな憎めへんやつや。

「なんべん聞いても答えへんで、そんなんより君、最近ここに来すぎちやうか？部活はどうしたんや」

横目に少し睨みつけて聞くとちびっ子はプイっとそっぽを向いた。

「ちよ、ちよつとやることがあるからいいんだもん」

近頃このちびっ子のお尋ね度合いが増えてる。ある時はいつものお喋りさんはどこ行ったんか、と聞きたくなるぐらい黙って考えとるときもある。そういえば最近うちのルームメイトの一ノ瀬によお絡んでるの見かけるな。まあちびっ子のことやさかいそうなんやろな。

「ほおそうけ。やったらうちんとこでだべってるって部長あたりにチクったるか」

「ちよ、タンマー！タンマー！わかった、わかったからもう聞かないから、ね？告げ口とかやめよ？ね？ね？」

うちの一言ですぐに焦った笑顔で答えた。

「はあ……君が他人のために頭使うんはええことや思うけど、あんまり干渉しすぎんのはよおないと思うで？辛くなるんは自分も他人も一緒なんやからな」

「ありや、せんちゃんにはかなわないなあ。でも、これは私のことだから気にしないでね」

葎は笑顔を緩めて少し微笑みながら、ありがとうつと付け足す。いつもよりちよつとぎこちない笑顔なんに気づけたんは今回が初めてやな。

「あはは、気になる人のこと、話したくなったら言っただけ」

肩をポンとたたいて葎はトテトテと部屋を出て行ってしまった。

「ほんま変なやつやな」

楽器を構え直し、ゆっくりと息を吸った。葎の言う通り、気になつてる人はおる。正直なんであんなんを気にしとんのかようわからへん。

最近の楽しみの一つにパックジュースをかうんにはまっとうって、あの日も練習帰りにジュースを買ったときやったかな。ちようどアツプルジュースがうちで売り切れた。まあ、そんなんよおあることやし気にせず帰ろうとしたわけやけど、少し帰路を進んだときにドンと音が響いたんやな。

振り返れば自販機前でうづくまる人が一人。まだ初夏の夕方やし明るいこともあつて姿もよう見えたから覚えとる。真つ黒なマントを羽織つた黒い髪の毛の長いやつちゃ。

正直気色悪い気もしたけど、体調不良とかやったたら放つとくんは悪いし声だけかけたわけやけど……………。

「なああんた？大丈夫「エデンの果実があああ!!」」

「なんやこの人。」

「痛い!？」

「心配して損しよつたわ」

その頭に一発だけお見舞いしたった。そんな力入ってないから痛くないと思うねんけど。

「い、いきなり殴るなんて!？」

「もう一発いれよか」

「ま、待つて待つて謝るから、驚かせてごめんって!」

立ち上がったその人をよう見ると、紫色の校章の刺繍が入つとる。一つ上の学年かいな。しかも二重の目立つ美人さんや。それより、演劇部か?にしても部活動中でもないのに役やつとるんかいな。

「ほれ」

「え?いいの?」

「殴つたんは悪かつたわ」

「あ、ありがとーあ、おかね」

アツプルジュースを押し付けそのまま走り去った。さすがに先輩なんはわからなかったし、いきなり殴ったんもあるし顔も合わせづらい。あんまりいざこざは好きとちやうねん。黙って受け取つといてくれや。

一瞬の出来事やったけどアレからなぜかあの先輩のこと考えとる。うちの思い過ぎしやったらええんやけど、もし役者としてあそこにおったんならうちもあれくらい入れ込んで音楽を試してみたいわ。

「はあ……」

また音がハズレ楽器を下ろす。ここ最近の調子是最悪や。数少ない友人である葎の助けも断って何してんねんやろ。

「せんちゃん」

「……なんや」

耳元で囁かれた声に内心ドキッとしてもうたわ。

「もうちよい前置きを置いて出てきてくれるか？」

「ごめんごめん。それよりお客さんだよ？せんちゃんくらい髪が長いおっきな二重の人！」

「なんやて？」

その一言に心臓が高鳴ったんは否定できなかった。

ー

「なんやて？」

「だあかあらあー二重で泣きぼくろのある髪の長い2年生が探してるんだってば！てか、前で待たせてるし！」

三回目の聞き返しに葎は頬を膨らませて、大振りに身振りしながら言った。さすがに、葎がいくら悪戯好きでちびっ子でも、ここまで詳細な情報持つての嘘は言わんやろし。葎の言っていることが本当だとすれば、おそらくあの先輩しかおらんはずや。

「なあ君、ほんまにそれうちに用ある人なんか？ここが女子高やっての忘れとらんよな？」

一瞬キョトンとして目を丸くした葎は、うちを上から下に吟味し目を見開いたまま首をかしげる。

「つり目で強い口調に容赦なく手を出せる楽器ケースを持った一年生って他にいるの？」

「……」

その情報は確かに、ここやうちが最有力候補か。あんの先輩はそこまでしつかり覚えとるんか。少なくとも手と口が出やすいのは1人おるけど、楽器ケースまではいかんな。失敗したな。

「そ、そうけ。確かにうちのなのもしれんけど、うちは心覚えないわ。悪いけどその人には人違いって伝えてもらえんか？」

「イ・ヤ・ダ」

「なんやと？」

楽器を構えたまま律を横目で見れば、夕日に照らされたその顔は今までに見たことがないくらい楽しそうで……。そして何よりも……。いたずらっぽかった。

ちびっ子の願い

「なあ、一応理由を聞いとくわ。面倒ごとに巻き込まれるうちを見た
いとか言ったらしばくからな」

「そんな理由じゃないよ」

いたずらな笑みの葎は声音を一変させ、うちの目の前に立ち
少し屈んで顎を引いた上目遣いで見上げる。自信に満ちたその表情
に嫌な予感を覚えさせた。

「気になる人」

ポツリと呟かれたその響きに背筋がゾワつとしよる。葎が
察しのいいやつなのは知つとる。やけど、その自信満々の表情で言わ
れるとは思ひもしなかった。自然と楽器を握る手に力がこもる。目
を逸らさない意識と否定の言葉を頭で作る。

「……なにを言うねんな。さつきも言うたけど、うちはそんな人のこ
と知らんし、なわけないやろ？」

「理由は」

笑みを崩さないままうちを見つめ確信があるとはばかりに口
を開く。ゆつたりとした時間にいやに緊張し、小さな口から紡がれる
柔らかいが鋭い音にピリピリと感じる。

「せんちゃん、私が気になる人のこと教えてって言う時と、さつき先輩
の特徴を伝えた時の表情が一緒だった。」

「……」

反論する余地ななかつた。葎の変わらない笑みが獲物
を捉えたとはかりにうちの心を囲む。反論できない。やっぱり葎に
だけは嘘はつけへんみたいやな。

「先輩は自分と似ているって、一人でいて、だけどしつかり立って、で
も本当はどこか寂しい気持ちがあるって」

「うるさいで」

突如として吹いた風に敏感に反応してしまう。うちのこの
性格が他人を寄せ付けないようにし、そして一部の人を嫌うように
なってから、葎みたいなお節介でもない人以外は近くに来てくれない

ことなんて、当事者であるうちが一番よおわかつてるっちゅうねん。「私が知ってるせんちゃんを私より短い時間で見抜いた人で、何より自分の境遇まで明かしてくれる人だから。私は、せんちゃんには会ってもらわなくちゃならないって思ったの。だから先輩と会って」

いつのまにかいたずらな笑みは消え、真剣な眼差しで葎はそう説いていた。小さく揺れる瞳はきつと彼女もそれを言うことを恐れているからだろうか。葎の立場を考えればうちとの関係なんか、数あるうちの一つに過ぎへんのに……。まあ……。久しぶりに一つ信じてみるのもいいかもしれへんな。

「君はやっぱりすごいわ。全部見透かされた気分やわ。正直寒気がしよるけど、まあ君が言うなら信じさせてもらおうかな」

うちの言葉に葎は真剣な顔つきから柔らかい笑顔を作り出した。まだ見たことがないほど明るくて暖かい無垢な、葎自身もたぶん意識したことがない微笑みやと思う。

「信じてくれてありがとう。じゃあ呼んでくるね」
そう言つて立ち上がった葎は扉に向かう途中、また振り返る。

「そうだ。一つ格言を教えるね。人と付き合う秘訣があるとすれば、まずはこちらが相手を好きになることではないか。きっと私も先輩もせんちゃんに何か好意を持てたから、ここにいるんだと思うよ。なにを思うかはわからないけど、時々思い出してみて」

手を合わせ、少し首をかしげて「お願い」と頼むような姿勢を取った葎は不思議と学生ではないように感じられた。

なあ、君は人の内側がどんなふうに見えるんや。ますます君がわからなくなってしまうそうで怖くなるわ。でも、君のアドバイスはなんだかんだ言っても初めてや。ありがとう。言わなきやな。言葉にするんや。

「……………な、なありつ……………」

突如として鳴り響いた大きな音とともに、葎を華麗に避けて一人の女性が舞い、うちの前でピタツと止まり、ビシツとうちを指差し言った。

「ようやく見つけたぞ！終焉を報せし奏者よ！」
うちの……うちの勇気を……この先輩は、ま
た……。

ラグナロク（仮）の始まり

「ようやく見つけたぞ！終焉を報せし奏者よ！」

言葉を遮り華麗に登場したそれはビシツとうちを指差し言い放った。一瞬のことに葎も驚いたのか目を見開いて振り返ってる。

葎が連れてきた人は、確かにあの時うちが叩いた人や。やけど今はそんなことどうでもええわ。二度もうちの勇気を出した行動を遮ったこの人には、もう一回ガツンとやってやらんと気がおさまらん。込み上げた怒りに勢いよく立ち上がり、大股で先輩に詰め寄る。

「きみは！なにやったんかわかってんのか！」

「え、あ、ちよ待って待ってさすがにそれは痛いから！」

咄嗟に肩を抑えられて振り上げかけた腕が止まる。うちとしたことが、怒りで我を忘れるなんて……き、きをつけな。

「あ……す、すまん。うちとしたことが……」

「き、きにしないでいいわ。まだ殴られてないし……」

「……」

「……」

また危害を加えそうになった事に気まずくなり、無意識に顔を下げしてしまう。怒ってはないみたいやけど上げづらい……。

「ね、ねえ？怒ってないからさ、ほら落ち着いて、ね？深呼吸深呼吸……」

そう言って大げさに息を吸って吐く動作をする。どつちが落ち着いてないのかいまいわからんな。

「落ち着くのはきみの方や。堂々と出てきておきながら、なに今になってテンパってんねん」

バタバタとした一瞬のやりとりに呆れ、顔を上げると少し焦った顔の先輩と、その後ろで笑いを堪えているのかプツクリと膨れている葎が目に入る。うちの目線に気がつき、微笑み直して「ごゆっくり」と言わんばかりにゆっくりと去っていった。

結局葎にはお礼の言葉は言えんかった。しかもあん時の人に見つかった。まあ、見つかるんも時間の問題やったか。なにより葎がくれ

た機会やあの娘の親切を無下にしたあかな。

肺に溜まったうっとうしい息を吐き、件の人の顔に目線移す。右目に泣きぼくろのある二重の美人さんやな。この間は焦つとったから気付かんかったけど、あんまり背変わらんのか。ちよい親近感湧くな。

「この間といい、殴ったり怒鳴ったり悪いことしたな。ごめん」

素直な言葉が出た事に内心驚きつつ先輩から一步下がる。ポーズまでしつかり決めとったんに、うちが詰めただけで縮こまるとこ見ると、近い距離感には慣れてないのかもな。

「この前のはあたしに非があるんだし気にしないでいいわ！あ、それよりこれ返しておくわ。ジュースありがとう」

そう言いつつ数枚の硬貨を渡される。

「ああ……どういたしまして？やな」

感謝の言葉も感謝に対する対応の言葉も、久しぶりなせいで少しぎこちない。ちよつともどかしい。

「えつと……なんて呼べばいい？」

「……う……あ、そやったな。うちの名前は淀巳鮮花や。まあ、君の好きなように呼び。きみは？」

「あたしは城ヶ崎い……」

名前を言いかけて固まった先輩に自然と首を傾げる。少し胸を張ってシャキツとした顔のまま固まってるのはなんとというか少し面白もんがあるな。

「どうしたんや？」

「ごめん、名前聞いても笑わないでね？」

「はあ……」

また少し縮こまって心配そうに言う。笑えてしまう名前なんか？

「城ヶ崎依衣子……」

笑える名前？なんか？別に変でもないし……まあ本人が気にしてんねんやったら一応気をつけとくか。

「わかった。よろしくな城ヶ崎先輩？」

「……あ、えつと……よろしく淀巳さん？」

予想していた反応と違ったのか、怪訝そうな顔を浮かべたままそう言ったのだった。

似たもん同士？

「やっほー」

「外で待機してたんちやうやろな」

城ヶ崎先輩と入れ替わりで教室に戻ってきた葎に毒づきながら簡易な楽器の清掃をする。ホルンは管が長いうえに細かいパーツで構成させている楽器で、大事に吹き続けるには普段の扱い方や吹き方だけやなく、吹く前吹いた後、他にも食べ物にも気をつけなあかん。とはいえ毎日細かい作業をやるのは部品の紛失とか手違いで破損させるかもしれないから、ある程度周期を決めてやることにしてる。

「ちちゃんと部活行ってきました！怒られたけど」

「怒られたんかいな」

ふんわりとかおる石鹸の匂いと、汗のせいかわしつとりした髪が嘘でない主張している。と、そんな確認よりもどうして葎が戻ってきたかのほうが重要やな。

「それより君、下校時刻は過ぎとるやろ。うちは片付けるのに時間かかるさかいはや帰りよ」

「ちよつと忘れ物しただけだよ。せんちゃんがいたからバイバイを言いにきたんだよ」

扉の前でピョンピョン飛び跳ねながらいう葎は、構ってほしさに駄々をこねる子どもみたいや。どちらにしろうちと違って寮生でない葎や、暗くなる前にはよ帰ってもらおうわなあかん。

「そうけ、また明日やな。お疲れさん」

「うん！また明日ね!!」

「あ、葎、すまん」

「どしたの？」

ふと反射的に帰らせてかけたのを呼び止める。ちよつど先輩も帰った。言いそびれた大切な言葉を今、言わなあかん。せつかく全て察して接してくれたのに、たった一言おくる言葉もないのは、友達以前に人として失礼や。

「葎、今日は、ありがとうな」

少し目を見開いて固まったが、すぐに口角を上げて微笑んだ。

「うん、どういたしまして！」

たった、一言のために顔が熱くなった。うちとしては久しぶりに使ったちゃんど感情を込めた言葉を葎はしつかり聞いてくれたみたいや。なんとか伝えられたことに妙な達成感を覚えて、また一つ肩の荷が下りるのを感じたのだった。

寮に戻るとルームメイトの一ノ瀬がベッドで眠つとつた。いつもやったら無愛想に机で勉強しとるかアルバイトで出払ってるのに、まだルームメイトになって長いわけやないけど、これからの学生生活でこの時間に寝顔が見れるのはおそらく今回限り、やろうな。

最近葎が絡んでんのよく見るし、もしかしたら葎に寄られて少し疲れたのかもしれない。

楽器ケースを下ろし、机の灯りをつけた。入寮してから全く変わらない部屋はお互いが突っ込んだ趣味を持っていないことを物語っている。変なところで似たもん同士なんも、なんかおもしろいもんやな。小さく寝息を立てる一ノ瀬は小洒落たヘッドホンをつけている。枕元には何冊か心理に関する本がおいてあった。一ノ瀬らしいというかなんというか。ポニーテールを解き、部屋着に着替えて、椅子に座る。

「お互い、あの小さいのに振り回されるのも、似てるんかもな」

一人小さく笑って机に教科書を広げたのだった。

予習復習を始めてしばらく経った。一ノ瀬がおるし夕食を一緒にしようと思ってるけど、当の本人がなかなか起きへん。食堂が閉まるのも時間の問題と考えたら起こした方がよさそうやな。

ヘッドホンを外して呼びかける。

「一ノ瀬はん」

肩をポンポンと叩き、さらに呼びかけた。

「ん」

「一ノ瀬はん、そろそろ起きたらどうなん？」

目を覚ましたようで、部屋の明かりが眩しいのか目を固くつぶる動作をする。一ノ瀬が状況確認する間、解いていた髪を再度まとめる。

「あ、……ごめん、待っててくれたの？」

「別に、目覚めが悪いだけやし、早よ行かな食堂閉まるで？」

「うん、……悪かったわね、待たせて」

そこで会話は途切れ、続いて部屋を出る。寝起きですぐ食事というのは少し悪いなど思いながら、いつもより遅いその歩幅に合わせて食堂へ向かう。横目に見たその表情はいつもと変わらず不機嫌そうだが、いつもよりもその視線が低い。考え事するんはいいけどぶつからんといてな。と、なんとなく考えていることを察しながら障害物を確認しておくのだった。

改1

授業が終わって少し経った放課後の教室、先ほどまでの喧嘩は消え、響くは声援や楽器の音色だけだ。そんなどこにでもある教室の一角、二つの影が揺れ動いていた。

そのうちの小さな影がピヨコピヨコと飛び跳ねながら可愛らしい声をあげる。

「ねえねえ、そろそろ話そ？そしてりっちゃんに相談しよーよお」

机に身を乗り出し相手にそう迫る高校生にしては小さい女の子は、この星花女子学園高等部の一年生で最も低い身長を持ち主、榛東葎だ。

「何度聞いてもおんなじよ、いても言わへんよ」

そんな彼女に絶賛構われ中なのは、方言の混じる言葉遣いに一本結びの少し長い髪の毛の切れ長の目の女性。その手にはキラキラと夕日を反射して輝くホルンを持つ、淀巳鮮花だ。少し眠たげに細めた目で葎を見据え毅然とした態度を保っている。

西の訛りある言葉は慣れない者が聞けば黙ってしまうが、入学間もないころから今のよう放課後構いに来ている葎は慣れない者ではなかった。

「…」

「…」

葎は鮮花に期待の笑顔で眼差しを向け見つめる。現在鮮花は葎に『気になる人がいそうです！今日はそんな顔をしている気がします！』という謎の疑問を一方的に吹っかけられ、あの手この手で聞きだそうとされている最中だ。

ただ鮮花も最近ようやく彼女の扱いがわかってきていた。一度ゆつくりとまばたきをすると、少し息を吸い鮮花は言った。

「自分、最近よう来てはるけど、部活どーしたん？」

その言葉に葎は明らかなほどに目をそらした。鮮花は内心で予想通りと悪い笑顔を作る。

「ちよ、ちよつと、やることあるからいいんだもん」

「ほお、ほな部長あたりにうちんここで駄弁ってることが知れてもええねんな」

「ちよ、タンマタンマ!!わか、わかったからもう聞かないから、ね?告げ口とかやめよ?ね?ね?」

ぎこちない笑顔で早口に律は答えた。その後下唇を軽く噛む。

律が放課後鮮花の練習部屋としている教室に来るのは、すでに慣れたものだ。ただその頻度は以前は1週間に1、2回程度だったものが、ここ最近では4、5回程度絶対来ている。いつもなら隣で時々喋りながら音を聞いているだけなのだが、ここ最近では少し離れたところで紙に図形や矢印を書いたり、どこを見つめるもなく何か考え事に没頭していたりして、鮮花としては律の行動は少し心配ものだ。

ただ、鮮花には彼女が何に悩んでいるのか、確証はないがなんとなくアテがある。

「律、何に悩んどるかわからんけど、難しかったら頼ってよ?」

その言葉に律は目を見開いて鮮花を見つめた。律の表情に一瞬鮮花は戸惑ったが、自身の発した言葉を反芻し何か変だっただろうかと思いつつも、首をかしげて律に、何?と問う。

「あ、いや。優しいこと言ってくれるんだって意外に思っちゃって」「ぷっ」

律の返事に鮮花は少し吹き出した。律が笑顔になるのにつられて鮮花も口角をあげる。自然と右手で隠そうとしてしまうのは癖だろうか。

「うちのことなんやおもてんねん。……ほんま」

手でくぐもる声の音上がる。律の評価は鮮花にとっては嬉しかったからだ。

「せんちゃんのことまた少し知れたなああって。ありがとう。まだ話せないけど、話せるようになったらその時はお願いする」

律は立ち上がりつつ、鮮花に笑顔を送る。鮮花はその笑顔が今まで見たものの中で最も自然だと感じた。期待の顔から困った顔そして笑顔と、二転三転するその表情の柔軟さに鮮花は正直感動していた。それは自身ができないと確信していることの一つだからだ。

「じゃ、もう行くね」

「ん」

「気になる人のこと、話したくなったら教えてねー」

「いればやなあ」

扉に隠れて見えなくなる律の背中では楽しそうで、ここ最近感じていた心配を感じさせなかった。律の姿が見えなくなり、静かになった教室には外から聞こえる運動部の声援と薄く響く金管楽器の音だけが残った。鮮花はいつものように譜面に視線を落とし練習へと切り替えようとすする。しかしうまくいかない。

律の予想は当たっていた。とある人物のことが頭から離れず、練習に身が入りきらない状態が続くようになっていく。しかもその意識は律が鋭いこともあって一層強くなっていた。

改2

ある日の放課後。

高等部に入学して以来鮮花にはとある日課がある。

「ふんふふーん♪」

ご機嫌に鼻歌を歌いながら教室へ戻る鮮花、その手にあるのはリンゴのパックジュースだ。そう、パックジュースを買うという日課だ。白いデザインの上にリンゴの絵が飾られたシンプルなデザインのパックジュース、校舎内にたった一つしかないパック飲料自販機のジュースだ。

ニツチながらも人気があり、近頃なかなか買えなかったばかりに、鮮花は嬉しく感じていた。

教室に戻った後も機嫌よく楽器を片付け寮に戻ろうと帰路を決める。

「そや、どーせやん一ノ瀬にも買ったろお」

ふと思いついたお節介により、その帰路の寄り道先が先ほどの自販機に足を向けさせる。一ノ瀬は共に桜花寮で過ごすルームメイトだ。無口だが真面目なのが特徴で、お互い気質が似ていることもあって寮生活自体は良好だ。と鮮花は思ってる。

ベルのように開いた特徴的な形の楽器ケースを片手に、自販機の集まる廊下の一角に向かう。既に他の吹奏楽部員の楽器音は聞こえず、外からの声援くらいが響いている、校内自体は静まり返っていた。

「…っ」

パック飲料自販機の前まで来た時、先ほどとは違う光景に鮮花は戸惑った。

自販機の前に黒い何かがうずくまっているのだ。

「うぐっ、ぐう…」

微かな唸り声が、うずくまっているのが人であることを知らしめる。よく見れば黒い布の隙間から見えるのは星花の制服だ。

「なあ自分、だいじよ…」

「禁断の果実がああああ!!!」

鮮花が声を掛けようと近づいた刹那、蹲っていた学生は突如立ち上がり、力一杯叫んだ。その咆哮は校内に響くには十分な音量で、間近で聞いた鮮花をプチンとさせる程度には威力があった。

「いったああああああ!!」

「えっらい大きな声ではるんやねえ、うちのゲンコツはよお効くやろお?」

反動でヒリヒリとする拳を振りながら鮮花は言う。鮮花の一撃に学生は頭を抑え跪いて悶える。

「い、いきなり殴るなんてえ〜!」

「もういつぺん、いつときはるか?」

「いえいえいえいえ、結構です!驚かせてすみませんでした!!」

某閻魔様並の無表情を湛えた顔で、某閻魔様のようなセリフを構えた拳と共に唱えた鮮花の様相に、学生は先ほどの威勢を一瞬で失って謝り散らかした。

なぜかその場で正座となつて鮮花の方を振り向いた学生は、二重に泣きホクロが特徴のそれなりに整った顔つきの人であった。シャツの胸に刺繍された百合の花は紫色、つまり高等部2年生であり、鮮花よりも年上だ。

さすがに先にビククリさせられたからと言って、叩いたのは少しばかり申し訳ないことをしたと鮮花は感じる。

「殴ってえらいすみませんなあ」

「あーいや、私の方こそ驚かせてごめんね」

鮮花にとつて対等に話をできない相手はあまり得意ではなかった。自身の使う方言交じりの言葉はうまく敬語を使つても、それほど良い印象を与えないことや、鮮花自身標準語をまだ上手には使えないためである。

殴られた先輩もゆっくりと立ち上がり、鮮花に向き合った。身長はほぼ同じようで、鮮花と目線が同じになる。

先輩の後ろ、パツクジュースの自販機に視線を向けると、アップルジュースはどうやら完売しているようで、赤く売切れの文字が点灯していた。先ほど先輩が“禁断の果実”と口にしたのはそのためか。

と鮮花は考え着く。

「あ、そや」

しばし、沈黙が続きかけた間に、鮮花は一つ思いつく。久しく手に入れたパックジュース、ちよつとばかり惜しかったが、先輩にアップルジュースを押し付けて、この場を去ることを思いついたのだ。

「ほれ」

「え?あ」

ふと鮮花が懐からアップルジュースを出して、先輩に押し付けると先輩は戸惑いながらもその手にジュースを握った。

「いいの?」

嬉しいのか目を輝かせた先輩に鮮花は安堵の息を内心でつく。

「まあ、つよー叩いたんは事実やし、とつといてーな。ほなな」

「あ、ちよつと!」

ふと走り出した鮮花を先輩は追いかけなかったが、鮮花の背中に何かを叫んでいた。

それが鮮花が最近思いを馳せる悩みの相手、結局あの場は逃げ出してしまい先輩の情報は何一つ手に入れられなかった。別に殴ったことや着けていたマントが気がかりなのではなく、ただ単に少しお話ししてみたいって言うのが理由だ。

お昼寝ガールズ 不思議な出会い

私には従姉妹がいる。クラスは違うけど同じ星花女子高等部に通っている。

正直言つて、私はずっと彼女が羨ましく嫉妬の対象にしている。いつだってその周囲を誰かが囲い、周りの人の孤独を許さない優しい従姉妹だ。

それに比べて私と言えば……

お昼休み、教室の隅っこに席がありその周りは比較的静かだから一人で本を読んでいる。冬休み前ということもあつてか今日はいつもより部屋がにぎやかだ。しかも私の所属する1年4組の人は他のクラスと交流のある人が多いから、他と比べればかなりにぎやかだろう。

中でも騒がしい人を紹介しよう。まず一人、相葉汐音だ。後ろの扉付近でたむろしているイケメン女子が相方なのだが、相葉さんは彼女が教室に来るだけで騒がしくなる。まあ大方イケメン女子の普段の態度のせいなのだけど。次に、教室の真ん中で大きな輪を作る黒咲凜だ。とても器用で料理が美味しいらしく、その性格もあつてか彼女がお弁当などを持ってきた時はもらいにくる人が後を絶たない。彼女自身は静かなだけれど、やはり人が集まればなんとやらで騒がしくなる。

誰一人として私の隣にはいない。羨ましいと自覚していながら、自分が孤独でなくなるための動きはしない。かといって下手に出て変なやつと思われてしまうのは嫌だ。まあでも……これくらいが似合っているのかもね。

何回目の読み返しかわからぬロシア語の本に目を落とす。小学生のとき一人でいた私に両親が買ってくれたものだ。退屈潰しにはなったけど、正直かなり苦労した。

集中しようとしたそのときだった。

「まあーりいーかあー!!」

相葉さんの声、またあのイケメン女子がなにかやらかしたのだろう。余計に騒がしくなって集中が乱れる。どうやら今日ばかりはここに居るのは居心地が良くないみたいだ。仕方ない、ちよつと寒いかもしれないけど気分転換に中庭に移動しよう。

本を懐に入れ、教室を出る。廊下は少し肌寒いが、割と廊下で過ごしている学生もいる。窓から見える中庭の日向にあるベンチは嬉しいことに空席だ。時々ぼーつとするために行くのだが、今日についてはみたいだ。

5組を通り過ぎる時に、横目に従姉妹の葎の席を確認する。そこに葎はいなかった、だけど少し後ろの方でつり目の髪の毛の長い子を構っているのが見えた。普段からオシヤレっ気がないのは知っているけど、今日は珍しいことにヘアピンを留めていた。何かいいことでもあったのだろうか。私もあんな対人能力欲しいものだ。

中庭につき、自分の定位置であるベンチに腰掛け懐から本を取り出す。少し冷たい風が肌を撫ぜるが、当たる陽の光がとても暖かく気にするほどの寒さではなかった。

「ひゃっ」

ベンチに落ち着いてほんの数秒、不意に後ろからした鳴き声に驚いて、変な声をあげながら振り向く。よく見るとベンチの後ろに何匹かの猫と、それに埋もれた学生が一人横になっている。残念ながら顔は猫に乗っかられていて見えないが、制服に刺繍された校章は紫色だ。確か紫色は一つ上の学年だったはずだ。一つ上の先輩にこんな方がいらつしやるとは……というかこれ、息できてるのか。

どちらにしろ、こんなところで寝ていると体調を崩しかねない。一応確認はとつてあとは自己責任だ。

「あのお……大丈夫ですか」

顔に乗っかっている猫を抱き離し、その顔に日光を当てる。目元の丸いおっとりした顔つきの先輩だ。発育の良い体には猫が3匹乗っていて、きれいに谷間の部分に1匹居座りコンパクトに収まっている。

「んあ……あう……おもいい……」

眠気眼で起きたその人は胸元に居座る猫の顔を少し見た後、あきらめたように頭を落とした。少し目をこすった後、相変わらず眠たそうな眼で私を見上げる。

「お昼寝ですよお……とつても気持ちいいんでえ……あなたも、どうですかあ」

ついでに今なら猫もつくよお、と付け加えてまた目をつぶろうとしている。

「風邪を引いても知らないですよ」

星花女子学園に変わり者が多いのは知っているけど、この時期で中庭でお昼寝というのはどうなのだろうか。確かに今日は日光がいい感じに当たるから暖かく感じるけども……まあ……騒がしいよりはいいか。

「んあ……」

持ち上げた猫を先輩の顔に置きなおし、ベンチに戻ったのだった。

偶然の出会い

優しく漂うコーヒーの香りがするカフェに蜜蜂はいた。学校の最寄り駅の近くだが、少し隠れるようにある小さなカフェだ。窓向きのカウンターに一人座り、教科書と向き合い復習と予習をする。毎日のように放課後はこのカフェに寄り、日が落ちるころに帰宅する。

昔からあのこがいて、周りの人は従姉妹だというだけで比べた。親の事情で引越してあのこのいる小学校に転校した。小学校という小さな空間で広がっていたあのこへの期待はそのまま従姉妹である私に降りかかった。何かあるたびに従姉妹と比べられ、そのたびに自分が期待薄い人間であると非難された。自分でもどんな人柄だったか忘れてたが、少なくとも小学校での出来事から少し冷たい人となったのは確実だろう。

カランコロンと突如響いた音に振り返る。なんでもないカフェの入り口の開閉音だ。しかし入ってきた人物に目が見開くのを抑えられなかった。ドアと比べてもかなり小さな体躯に軽快な足取りながら背筋を伸ばして歩く姿、見えた制服には黄色い刺繍の校章が飾られており、適度に伸ばされたセミロングの黒髪の少女だ。

「マスター、カフェラテのホットとパンケーキください」

調理台と繋がったカウンターの前で元気な声でマスターに告げる。蜜蜂はその少女をよく知っていた。蜜蜂はそれに気づかないふりをして即座に教科書へ視線を戻した、がそんなのは気休めにもならなかった。

「みっちゃん発見！偶然だねー！」

突然隣から響いた声にビクツと体を震わせた。気づけば隣に陣取っていたそのこは蜜蜂を見て緩やかな微笑みを浮かべていた。

蜜蜂は大きく諦めのため息をつくとともに一度頭を垂れた。

「葎ねえ、カフェだからもう少し静かに」

榛東葎、蜜蜂の従姉妹で、蜜蜂が最も目標としてライバル視する相手だ。とはいえ、学力と成績は彼女に劣らぬ自信が蜜蜂にはある。ただ、葎の持つ魅力や能力は決して卓上には表れない。

「おっと、こりや失礼」

葎は口元を抑える仕草をしながら少し周囲を気にする。昔からそうだが、この何気ない動作が思っていることと一致するのは彼女が好かれる要因の一つだろう。

そんな動作をする葎をよそに蜜蜂は勉強に戻った。しかし、ふと葎はいつもと変わって曇った声でつぶやいた。

「私もみっちゃんを見習わないとなあ。大学に行つてまだまだいろんなことを知りたいし」

蜜蜂は横目に視線を送る。窓の外を眺めているが、どちらかといえど何か違うことを考えている顔だろうか。とはいえ、彼女の現在の振る舞いや勉強方法を見る限り、良い大学に行くのには到底努力不足と言えらるだろう。なにより葎は商業科の学生だ。大学進学のための勉強も加えるとなると今よりも努力が必要となる。

「葎ねえがどこまで目指すかによるかな」

大学進学率も上昇傾向にある今の国では、その競争倍率もうなぎ上りだ。それに勝ち残る努力をする必要が葎ねえにはある。だけど、今の葎ねえを見るに卓上では絶対私に勝てないだろうと思う。

「そうだよね。目標だけ決めて道のりを見れていないのは止まっているのと同じだもんね。うん、もう少し考えてみる。ありがとう」

蜜蜂に向き直つて浮かべた葎の微笑みはとても自然で、蜜蜂には到底できないひきつける魅力のこもったものだった。きつと本気で思っているんだ。蜜蜂は葎にこういった面では絶対に勝てないとまた心で思った。

カランコロンとまた扉が開いた。

「あ、瀬瀬さんだ」

葎が振り向いて小さく声をあげる。どうやら知り合いらしい。

「あ、あの、このパンケーキとショートケーキと、あとカフェモカください」

ただたどしい言葉で店員さんに告げる女の子は、星花女子高等学校の制服で蜜蜂や葎と同じ色の刺繍がされていた。机に置かれた高そうなカメラとポニーテールが特徴のどこかお嬢様気質な学生だ。

「知り合い？」

「うん、同じクラスの瀬瀬幸来さんだよ。甘いものは苦手って言ってただけど、やっぱり何か照れ隠しだったのかな。可愛いね」

葎はどこか楽し気にそう言って椅子に座りなおした。いいもの見ちゃった、と付け足して取り出した手帳に書き込んでいる。それより好みを隠すってどんな照れ隠しだ。と、それよりそろそろ時間かな。

「葎ねえ、私もう帰るね」

教科書やノートを手早く片付け、代わりに財布を取り出して伝票をとる。

「うん、みっちゃん気を付けてね。私はもう少しのんびりしてくね」

手帳をパタンと閉じて控えめに手を振ってくれる。さっきの笑みを浮かべたまま、なぜか目元が寂しげになっている。その表情に一瞬戸惑った。従姉妹として長いがその表情の意味が読み取れなかった。

「んーおいひいー!! たまらないわ!!」

ふと聞こえた声に振り返るとききほどの女の子が、パンケーキを頬張ってこれ以上ないくらいの笑顔を浮かべていた。

蜜蜂が葎に視線を戻したとき、葎はまた女の子を見ていた。一瞬蜜蜂に見せた寂しげな表情とは打って変わって、誰がどうみても楽しんでいる笑顔だった。先ほどのことを忘れるように蜜蜂はレジに向かった。

店を出るとき、ほんの腹いせに女の子に視線を送って、気が付いた瞬間に隣を指さして葎の存在を報せてやった。おかげで扉を開けると小さな悲鳴が聞こえるのは同時だった。